

昆明での交通事情観察記

2002年末～2003年正月



牡丹雪舞う石林

2002年末から2003年正月にかけてA旅行社の雲南省観光旅行に参加した。このときオーバーブッキングという業界用語を初めて知る。航空会社やホテルなどが効率的に旅客を埋めるため、定員以上の予約を取ってしまうことだ。申し込んだ旅行は、9月頃に予約したのに、航空会社がオーバーブッキングで、昆明直行便のはずが、広州経由となってしまい、初期の予定では8泊9日のところ、広州一泊が増え9泊10の旅に変わった。おかげで、普段国内旅行では7～8千円の安宿ばかりに使うのに、広州の5つ★のホテル「白天鵝賓館」に泊まることができた。旅行会社苦心の変更案は、朝一番の昆明行きに乗る強行軍で、まだ暗い6時の朝食となる。さすが、5つ★だけあってバイキング形式の朝食は、ほとんど出そろっていた。眠い体にむりやり朝食を詰め込み、旅の期待をいだいて雲南省観光に向かった。

旅の時間は早く流れる。各地で寒さに震えたり（日本でもそうだが、南国の冬は、暖房が貧弱なので室内が寒いことが多い。雲南省各地でも頼りない暖房のため、寒さに震えた）、高度障害の人（麗江は標高2300メートル）、食べ過ぎた人、などいたが、皆さん後半には回復した。

順調に旅程をこなし、とうとう最終日、昆明石林見学と有名レストランでの夕食を残すだけとなった。石林は旅行の目玉の一つで、外すわけにはいかない。暖かいシーサンパンナから飛行機で昆明へ昼すぎ着。昆明飛行場からどこにも寄らず、石林見学。とんぼ返りで昆明市に戻ると夕食で、昆明名物の「過橋米線」を食べ、あわただしく夜22時の便で広州に戻るとというのが予定だった。

昆明飛行場から、石林へ向かう行程の半ばほどで、窓の外を観るとなんと雪が降り始めている。常春の都昆明で雪が降るとは思わなかった（後で調べると数年おきに降るらしい）。積もるようではないが、先のことは解らない。添乗員のお姉さんT嬢は眉間にしわを作り、心配顔になった。交通渋滞になれば、「過橋米線」を食べられないし、最悪には広州行きの飛行機に乗り遅れる。そこで雪のこと故、ここで引き返した方がよいのではと、一行10人に提示した。私の仲間6人は山登りの経験上、天気には逆らえない、引き返すのはやむを得ないと思った。特に食通のYさんは、「過橋米線」の優先順位が「石林見学」よりはるか上位にあるので、

すぐに戻るべきだと言った。ところが、ここまで来たのだから行くべきであると、断固宣言する人がいた。名古屋から来たG夫婦である。彼らはカラフルな装いをした、旅慣れた熟年元気夫婦で、装飾品や持ち物を旅先で調達したモノで固めている。ここまで来て戻る手はないときっぱりと宣言。G氏のまくし立てる名古屋弁に、添乗員のT嬢と現地ガイドの周さんは困惑の体であった。ここまで一緒に旅をして分かったところでは、G夫妻はA旅行社の上得意のようだ。数多く参加する人が恩恵を受ける割引料金で参加することもあるらしい。従って彼の発言は、T嬢とすれば無視できないのであろう。帰国してからねじ込まれたら問題である（これは私の邪推です）。

走るバスから外を見れば、雪は本格的な降りになった。私は、運転手に判断を仰げば「この雪では無理だ」との返事をもらえろと思いき、運転手に聞いてみたらと言ったが、これが間違いだった。運転手氏は職業に誇りを持っており、うまいところを見せてやろうと思ったのだろう。

「行けるところまで行ってみよう」との返事。プロの運転手ならば、この程度の雪は恐れてはいけないのだ。ガイドの周さんも「雲南省の運転手の腕は中国一だ」ということをしばしば言っていたが、こうしてG夫婦の発言に軍配が上がり雪景色の石林に着いてしまった。

入場料を払い、「石林站」の中に入ったが、少し入ったあたりで、帰路を考えあわただしくバスに戻ることになる。どうだ、石林を観たのだ、文句があるかという心境か？ 添乗員のT嬢はもしもの籠城に備え、売店で菓子を買う。

帰路の道は思ったより順調に進み、予定時間通り昆明に着くとさえ思った。しかし甘かった、石林より昆明の方が標高が高いのである。温度が下がってくると、降った雪が融けないで路面がシャーベット状になった。そのうえ上り坂のカーブが続く。渋滞、停止、こんなとき日本なら車はおとなしく、前が行けば、前を詰める。前が止まれば、こちらも止まるが普通だろう。

だがここは、雲南省。政府は当てにしない、他人も当てにしない。当てにするのは、自分と身内だけ。恐るべし交通習慣。対向車線からの車が来ないと、かまわず反対車線に乗り入れる。空いているところは一応割り込む。一時は、上下車線が昆明を目指してのろのろと進む一方通行まがいの道になった。チェーンとか冬のタイヤは他の惑星の話だ。つるつるのタイヤで積載オーバーのトラックが、尻を振りながら動く。皆が、規則通りに順序よく進めば、結果としては時間的に速いのだが、我も我もと、えさをねだる雛鳥のように隙あらば、突っ込む。大きなトラックは自分の車幅の隙間を見つけると入り込む。小さい車は、側溝すれすれに前に出る。車列は入り乱れた麻雀パイのようだ。車同士の軽度の接触があったりするが、どうせほとんどがボロ車だし、気にしないで、ひたすら前進する努力に精力を傾ける。

あたりは暗くなってしまった。坂の途中で止まってからどのくらい経つたろう。だいぶ前から、バスは燃料節約のためエンジンを切ってしまった。もともと往復の燃料+ α 程度しかなかったのだ。燃料計の針は0にかなり近い。あまり効かなかった暖房も切れてしまった。金属製のバスは、すっかり温度が下がり足もとが冷える。衣類の入ったトランク類は、すぐに発てるよう、飛行場に置いてきてしまった。寒さに震える女性たちに、冬山遭難時のように、新聞紙を衣服の下に巻くようにと助言した。いぶかしながら実行した女性らは、かなり効果があり、これから冬の旅に新聞紙必携だとの声も出た。



麗江の屋根



大理三塔

今夜はバスで夜明かしかと思われてきた。思い出したように、エンジンを掛け、50メートルくらい走ると、エンジンを切る。これの繰り返しである。ガイドの周さんは、今後の打ち合わせであろうか、しばしば携帯でどこかと連絡している。あまり動かないときには、周さんは車列の雪道を、先の方まで様子を見に行った。かなりの時間が経ってから戻ってきたが、ずーっと車が止まっているとの報告。コートが雪ですっかり濡れている。

誠実な人だと思った。

夕食の時間は過ぎてしまった。腹が減った。石林の売店でT嬢が仕入れた菓子もすでに食べてしまった。石林へ行くと言い張ったG氏は神妙に黙り込んでいる。寒いので当然、生理的欲求も起こる。男性はよいが、女性6人は難儀だ。しかし、昆明まではもたないし……どうしよう。とうとう前後から見えない、カーブの場所を選び、自分のバスの間に紛れて電撃決行する。雲南省の「ニーハオトイレ」を十分体験したので抵抗なく実行できたようだ。普段から野外用足し大好き、S女は嬉々として先頭に立って外に出た。ひとりM女のみは特大の膀胱の持ち主なのか「連れション」に加わらなかつたらしい。尊敬すべきモラルの持ち主であると思った。

限りない忍耐の後、地元運転手のみが知る闇の間道を途中から使ったりして、昆明の飛行場へたどり着いた。我々が乗る飛行機間に合うかどうかは微妙であったが、飛行場は積雪のため閉鎖となっていた。今日は飛ばない。G氏は嬉しそうに「どうせ飛ばないのだから石林を観ておいて良かった」と言った。

その夜の緊急の宿は、軍隊が使うらしい「賓館」に割り当てられた。「過橋米線」を楽しむはずが、照明を落とした××賓館の食堂で、わびしく急ごしらえのスープなどをすすった。夜の12時近かった。もう1泊増えた。